

西洋中世学会第4回大会

自由論題報告・報告要旨

第1報告 年代記におけるエドワード二世妃—王妃イザベラはどのように描かれていったか

常木清夏（お茶の水女子大学大学院）

イングランド王エドワード二世妃イザベラ（1295–1358）は、愛人と噂されたロジャー・モーティマらとともに兵を率いて国王エドワード二世を捕え、最終的に廃位へと追い込んだ人物として知られている。エドワード二世治世末期から彼女の息子エドワード三世の治世初期にかけてイザベラは政治的に重要な役割を果たしている。オムロッドは W. M. Ormrod, “The Sexualities of Edward II” In G. Dodd and A. Musson eds. *The Reign of Edward II: New Perspectives*. Woodbridge: York Medieval Press, 2006, pp. 22-47.の中で、彼女のイメージにまつわる問題について論じている。成長したエドワード三世は、母親とモーティマから権力を取り戻すために、彼の父親を貶めるイメージをめぐい去ることと母親のイメージを変化させることに努めた。モーティマと不倫関係に陥った上に権力を掌握した王妃というジェンダー規範から外れた母親のイメージを一掃し、本来の従属的な役割を担う王妃像のイメージを定着させようと試みることで、エドワード三世は自身の正当性をも危うくする両親のこじれた夫婦関係のイメージを正常化しようとした。このことからわかるのは、国王と王妃の両方ともに、彼らのセクシュアリティやジェンダー役割を不適切だと示すこと、または回復させることによって、実際の政治において影響を与えようとする動きが見られるということである。

オムロッドはエドワード二世治世末期からエドワード三世期にかけてのイザベラに対するイメージの変化のみを取り上げているが、エドワード二世治世前半においてイザベラがどのような王妃像として描かれていたかを明らかにしなければ、エドワード三世が宮廷内のジェンダー規範を正常化するために元に戻そうとした王妃像がどのようなものであったかを理解するのは難しい。そこで本報告では、年代記においてエドワード二世治世初期からエドワード三世期初期にかけてのイザベラ像がいかに描写されているかを分析することで、政治情勢の変化と年代記内の王妃イザベラ像の描写の変化にどのような関連があるかについて考察する。

第2報告 15世紀ヴェネツィアにおける聖母子像の変容—クレタのイコン画家による聖母子像の制作と流通を中心に

衣笠弥生（京都大学大学院）

15世紀ヴェネツィアでは、身体や背景描写に同時代フランドルやトスカーナの自然主義的な表

現をとりいれながらも、その容貌、聖母と幼児キリストのクローズアップや半身像などアイコンに由来する様式を継承した聖母子像が多く描かれた。この要因の一つとして、クレタ島で大量生産されヴェネツィアでも流通していたアイコンが影響していることを本発表では検証する。

15世紀初頭、多くのアイコン画家がコンスタンチノーブルから移住し活動していたヴェネツィア領クレタは、東方ギリシア正教会に由来するアイコン制作の中心地となっていた。彼らは「マドンネリ」と呼ばれ、東方のみならずヴェネツィアをはじめ西方カトリック世界への輸出品として聖母子像を制作し、ヴェネツィアで活動する者もいた。クレタ・アイコンについては、近年マリア・ヴァシラキによるアンゲロス・アコタントスとその周辺画家の作品同定や制作状況の解明から、西方絵画との相互影響を探る端緒が開かれた。その特徴のひとつは、ビザンティン・アイコンの規範を逸脱する様式の変形が見られることである。市場のニーズに応じて聖母子像は、伝統的な「ギリシア様式」にも、同時代の絵画の技法を採り入れた「ラテン様式」にも描きわけられ、さらに画家の署名が施されたのである。また、当時のアイコン市場では、需要の増大に応じて、大衆層向けに聖母子像が画一的に大量生産された一方で、富裕層向けには礼拝・奉納目的ではない装飾品・収集品としても多様な形態が形作られていった。

したがって本発表では、これらクレタ・アイコンの流通および消費の実態を明らかにしたうえで、ヴェネツィアのジョヴァンニ・ベッリーニや、同地で活動したシチリア人画家アントネッロ・ダ・メッシーナの作品の様式を比較検討する。それによって、東方と西方の様式を融合したヴェネツィアの聖母子像の変容の在り方に、こうしたクレタ・アイコンがその一因としてあったことを指摘したいと考える。

第3報告 15世紀末におけるドミニコ会教育の変容—アヴィニョン「嘆きの聖母」学寮の事例から

梶原洋一（東京大学大学院・リヨン第2大学）

異端の論破と民衆説教を使命として誕生したドミニコ会は、当初から勉学、つまり神学的知識の吸収と継承を活動の柱とした。修道会は、階層制を伴う独自の学院ネットワークを構築し、修道士の教育体制の整備を進めた。13世紀を中心とするその発達過程については、すでに豊富な研究蓄積が存在する。しかしながら、反対に、黒死病の流行、教会大分裂を経た中世末期におけるドミニコ会教育の実態は、いまだ十分に解明されていない。結果、大学神学部との関係、厳修派（Observantes）による修道会改革の影響、勃興する人文主義運動への反応といった重要な問いの数々は、開かれたままである。

これら多彩な論点を包括した、中世末期ドミニコ会教育の体系的考察の出発点として、本報告では、15世紀末にアヴィニョン大学神学部教授を務めたドミニコ会士バルトロメウス・デ・リゲティスが、修道会入会への準備段階にある修練士の教育のため、私財を投じて設立した「嘆きの聖母」学寮の事例を取り上げる。とりわけ、学寮が残した創設証書や規約だけでなく、ドミニコ会の内部文書を併せて参照し、従来アヴィニョン大学史の文脈においてしか取り上げられてこなかったこの施設を、ドミニコ会教育の歴史的展開の中に位置づける。

その際、主に次のような問いを念頭に考察を進める。第一に、この試みは既存のドミニコ会学院網が抱えるどのような問題点、欠陥に対処するものだったのか。創設者の問題意識、彼が選択した方法は、ドミニコ会全体の政策に照らしてどう評価されるのか。

第二に、人文主義が修道会にもたらした影響にも注意を払いたい。学寮の教育プログラムは、新しい思潮をいかに反映していたのか。そこから、アヴィニョンのドミニコ会士たちを取り巻く、どんな知的世界が浮かび上がるのか。

こうした視点から眺めるとき、中世大学史・ドミニコ会史の中で異彩を放つこの施設は、ドミニコ会教育の変容を映す鏡として立ち現われるであろう。

第4報告 「聖エリーザベト」の誕生と発展－13世紀聖人伝に見る列聖と移葬

三浦 麻美（中央大学大学院）

テューリンゲンの聖エリーザベト(1207-1231年)は、13世紀に最も崇敬を集めた聖人の一人である。彼女はハンガリー王女、テューリンゲン方伯夫人という高身分でありながら、清貧を理由に教皇により聖人とされた。彼女の列聖は教皇が委託した審問の記録が残された初期の事例であり、13世紀中の複数の伝記が崇敬の拡大を示していることから注目を集めてきた。

聖人は教義の上で神と人間をとりなす力を持つとされ、その崇敬を王や貴族といった世俗の権力者も積極的に推進し、政治的にも利用した。また貴族以外の俗人も都市共同体の利益のために聖人を用い、墓への巡礼や招致などを通じて聖人崇敬に関わった。その際に聖人が神の恩寵を受けた徴が奇蹟であり、古くは奇蹟の発生をきっかけとした崇敬が当該教区の聖職者に承認され、移葬などにより聖人として告知された。しかし13世紀になると第4ラテラノ公会議を経て教会組織の制度化が進む中、聖人の認定にも変化が生じ、教皇は列聖の決定権が自らにあると主張して審問制度の整備を進めた。ハインツェルマンが相対的にこの時期における移葬の重要性の低下を指摘したことは、聖人としての公布をめぐるシステムの変化を示している。

また13世紀には聖人伝が奇蹟を通じて聖人の功德の大きさを描くだけではなく、生涯の記述も重視して読者に模倣を奨励し、聖人伝記述の多様化が見られた。テューリンゲンの聖エリーザベトに関する史料は、この変化を背景に聖人像の形成過程が検証可能となる貴重な事例である。

エリーザベトは生涯修道院に入ることなく、施療院で清貧を実践したことを理由に教皇グレゴリウス9世に1235年死後4年という異例の早さで列聖された。また1236年にマールブルクで行われた移葬には神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世が参加した。この事情から列聖公布や移葬は関係者の政治的意図や地域史の観点から多く論じられてきた。本報告はこれらが聖人としての認定を告げることを目的とした点に注目する。エリーザベトの聖人伝が列聖公布や移葬をどのように記述したかの考察を通じて、崇敬が拡大し、聖人としての地位を確立した過程を読み取る。主要な史料としては、エアフルトのドミニコ会士アポルダのディートリヒが13世紀末に執筆した『聖エリーザベト伝』を用いる。この伝記は13世紀に成立したエリーザベトの伝記をほぼ全て参照し、聖人像を集約した内容とであると同時に、14世紀以降最も普及した彼女の伝記として中世後期におけるエリーザベト崇敬の基礎となった。この『聖エリーザベト伝』の分析を通じ、テューリン

ゲンの聖エリーザベトがどのように聖人として提示され、社会的に認知されたかを考察する。

第5報告 中世の継承者としてのエラスムス：1520年代の論争を通して

河野 雄一（慶應義塾大学大学院）

中世とエラスムスの関係については、彼の神学や言語についての研究の発展に伴い、近年、その多様性が示されつつある。エラスムスは中世の冥闇を批判した人文主義者、あるいは宗教改革後に保守化した人文主義者の代表として一般的に認識されることが多い。しかしながら、近年の研究において、イシュトファン・ベッツィは『エラスムスと中世：キリスト教人文主義者の歴史意識』（2001年）を著したが、これは中世の過去に対する彼の態度や彼の歴史意識を包括的に概観し、エラスムスにとって中世の価値は古くからの宗教的真理の保存にあるということを示した。

本稿は、基本的にベッツィの主張に沿いながらも、一五二〇年代における保守的カトリック、ルター主義者、キケロ主義者のような様々な相手とエラスムスの論争という観点から、エラスムスと中世の関係についての新たな見方の可能性、すなわち、エラスムスが教父を媒介とした中世の修辞学の伝統の継承者としての側面を有していたことを検討する。

本研究は三部に分けられる。第一部は、『反野蛮人論』や『痴愚礼讃』のような初期作品において、後期中世に特徴的な神学者たちに対するエラスムスの批判を考察する。第二部、第三部では、ルター主義者とキケロ主義者の双方が中世の過去を無視しており、それゆえエラスムスが彼らを斥けて宗教文化と文学において中世的伝統を擁護しようとしたことが論じられる。

最後に、本稿は、キリスト教的敬虔を目的として、教父を媒介として中世において受け継がれてきた修辞学を中心とした学問を修得したうえで、名誉ある行いへと人々を説得すること、これこそがエラスムスの課題であり、教育的・政治的実践への契機を孕むものであったことを明らかにする。